

台風による大雨や交通機関の乱れが心配されましたが、幸いにも影響少なく無事に審査会を開催することができました。早朝からご準備頂いた部会事務局と係員の皆様にご感謝申し上げます。審査に先立ち、居合道部会伊藤会長から審査員に対し「審査基準以外に受審者の将来性もみてほしい」とのご訓示を頂いて、審査に臨みました。

初段審査では動きにぎこちなさが見られたものの、二段三段と審査が進むにつれて技の流れが出てきた点はとても良かったです。各段で技の所作を間違える方が若干見られたのは残念でしたが、結果は高い合格率となりました。合格された方はさらに上の段を目指し、残念ながら不合格になられた方はぜひ再挑戦をお願いしたいと思います。

その将来のためにも、審査員として気づいた点、今後の稽古のポイントを参考までに申し上げます。来春の審査会を控えた方含む、全ての受審者と指導にあたられている先生方にも目を通して頂けると幸いに存じます。

まず礼法についてです。

二段三段と進むにつれて、全剣連居合（解説）で決められた作法が出来ない方が多くなるのが残念でした。足を引いて座る、鐙にかけるはずの指がかかっている、鎧近くを軽く握らず指を伸ばして添えている、脱刀するとき左手が左帯ではなく左太腿部にある、正座から立ち上がる時に右足を左膝頭より前に出す、等々、いずれも正しくありません。

礼法を見れば普段の稽古の様子がわかります。指先まで意識して、敬う心をこめた「丁寧で美しい礼法」を日頃から心がけてください。

次に足捌きについてです。

技の順番を覚えると、高段の先生や先輩のように刀を勢いよく振りたくなるものですが、そのためには、腰の入った体幹がしっかりしていなければなりません。そして、その体を崩さないように動くためには、正しい足捌きや体捌きが求められます。まずは、この足捌きをしっかり稽古してください。

後ろ足が極端な撞木足のために左腰が開いている方が多く、敵に正しく向き直れていません。また、摺り足が出来ていない、体の向きを変える時に後ろ足の踵が床に着いている、立ち枝で切る時に左足を右足近くまで送り足をする、後ろ足の膝が曲がっている、といった方も多くみられました。

どうか初心の内から、正しい足捌きの稽古もお願いします。正しい足捌きの体得が正しい

体捌きにつながります。これらを疎かにしたまま進むと、四・五段審査はもちろん、さらには上の全国審査はかなり厳しいものになってしまいます。

次に刀の操法についてです。

刀を自由自在に扱えるようになるためには、正しい刀の持ち方が大切になるのですが、ほとんどの方が出来ていませんでした。『全日本剣道連盟居合（解説）』（以下、教本）の34ページ「(八) 柄の握り方」を常に確認しながら、三段までに正しい柄の握り方を習得してください。正しい握り方が、段が上がるにつれてより求められる掌中の作用、いわゆる「手の内」の良し悪しにつながります。

正しい刀の握り方の体得と同時に、「十分な鞘引き」ができるようにしっかり稽古してください。「鞘引き」は一本目「前」の抜き付けの時だけではありません。刀を抜いて、刀を納める時の必要不可欠な操法の一つで、全ての技に共通する大事なポイントです。

「十分な鞘引き」を可能にするのは左手の使い方によりますが、ほとんどの方が左手の動きが小さく、右手で刀を抜いて右手で納めていました。特に指定技の「前」の抜き付け、「三方切り」と「添え手突き」の抜き打ちで「十分な鞘引き」が出来ていないために、右手で刀を鞘から引っっこ抜くような「抜き付け」「抜き打ち」になってしまい、居合の生命である「鞘放れ」の冴えがなく切っ先が走っていませんでした。また「顔面当て」でも腰の回転が伴う分抜きやすくなるためか、「十分な鞘引き」がなく、そのため、右手で引っっこ抜いてしまい刀が体から大きく外れてしまう方も多かったです。

「鞘引き」は簡単なようですが、実は難しく奥が深いものです。しっかり稽古なさってください。

最後にまとめです。

試合で活躍している高段者の技を見ると、刀を勢いよく速く鋭く振りたくなるものですが、まずは、「正しく大きく」体と刀が扱えるように稽古なさってください。それができれば自然と刀は速く強く振れるようになります。

三段以下の審査ポイントは、①正しい着装と作法 ②正確な抜き付け、切付け ③正確な血振り、角度 ④正確な納刀 です。そして②～④にある刀の操作、いわゆる刀法を支える土台が、足捌きや体捌きといった体法です。土台がしっかりしていないと高層階建築ができないのと同じで、初心の時から、刀法だけでなく、足捌き、体捌きの体法の稽古もお願いします。

皆さんの一層の上達とご精武を心から願っております。

以上